

2022 年度 文教大学生生活科学研究所

公開講座記録

開催日時 2023 年 2 月 12 日（日） 13:30-16:00

会場 文教大学越谷キャンパス 14 号館 14101+Zoom ウェビナー

開会の挨拶	研究所所長	金 藤 ふゆ子
司会進行	研究所研究員	水 野 陽 介
コーディネーター	研究所研修部主任	二 宮 雅 也

〈テーマ〉

「ウクライナ避難民から考える多文化共生
— The Volunteer for Ukraine —

◆基調講演（発表要旨）

ウクライナ東部の戦闘地域では多くの障害を持った人たちが避難もできず、現地に取り残されている。紛争や災害などで最も弱い立場の障害者に対しては、国連にも専門の機関はない。日本財団では私自身が陣頭指揮をとりウクライナ東部の戦闘地域から障害者の救出を行なった。特徴的なのは、ウクライナ国内や周辺国に広がる数百万人のユダヤ系住民のネットワークを活用していることだ。これまでに 4000 人以上の障害者をウクライナ国内外に避難させている。

現地を見なければ判断を間違える。NHK の国際報道記者として 20 年にわたりイラク、アフガニスタン、ワシントンなどで安全保障問題取材した経験からそのことを確信していた。メディアは戦争の全体像を伝えられない。国内でのニュースを見ていると、あたかもウクライナ全土が戦闘状態にあるかのような錯覚を持つのである。今後の事業の方針について、こうした間違いを避けるためにもリスクを最大限管理しながら戦闘地域を訪問する決断をした。日本財団職員に戦地への出張は命じられなかったため、役員である私が私の判断と自己責任で現地に向かった。

プシュミシル駅でポーランドを出国し、ウクライナに入国。西部の都市リヴィウに到着すると、街は活気に溢れ、戦争をしている国とはとても思えない。ウクライナはキャンディやチョコレートなどのお菓子王国で、街にはおしゃれに飾られたキャンディショップが軒を連ねる。通りには高級車が行き交いレストランは多くの人で賑わっている。少なくとも戦闘地域から離れた西部の街では人々は日常の生活を取り戻したかのように見えた。ガソリンスタンドもオープンし、内には豊富な商品（ビールや食品類も）が陳列されている。ただし、ミサイル警報が出ると閉店してしまう。

リヴィウで 1 泊後、首都キーウを経由しハルキウに向かう。途中食事や休憩を入れて約 10 時間、キーウ郊外に到着した。ロシア軍が首都周辺を占拠した際、住民の虐殺が行われた町、ブチャだ。ロシア軍撤退後、残虐な住民の殺害が明らかになった街である。虐殺から数か月が経ち、筆者が訪れた 10 月初めにはブチャの町にはスーパーなどが再建されていた。一見、住民は以前の生活を取

り戻しているように見える。しかし、平穏な街が突如恐怖と化した記憶は住民の中からは消えず、多くの人は一生涯の傷を背負って生きていくことになるのだろう。

首都キーウに入ると、市民は金曜の午後を謳歌していた。町の広場には多くの人が家族連れなどで繰り出し、爽やかな秋のそよ風を楽しんでいた。500キロ離れた国の東側では激しい戦闘が続いている。日本に置き換えれば、東京と大阪くらいの距離である。広い広場にも流石に観光客らしき人は見かけず、アジア系は私ただ1人である。

2日目の夜は首都キーウ市内のホテルに宿泊。夜中に2回、空襲警報が鳴る。ロシアからは頻繁にミサイルが飛んでくるが、ほとんどは首都防衛の迎撃システムで撃ち落とされている。キーウ市内でミサイルに被弾する可能性は極めて低い。地下駐車場の一角は椅子やソファが設けられ、シェルターとして使われている。しかし、警報を受けて地下の駐車場に避難したのは筆者を含め国際援助関係者の外国人4人だけだった。

ポーランドとの国境から陸路3日をかけて、前線の都市、東部ハルキウに到着した。今回、我々の身元を保証し、現地のガイド役を務めてくれたのがハルキウ市の赤十字だ。彼らとのコネクションがなければ、戦闘地域までの訪問は考えていなかった。ハルキウ市中心部から一番近いロシア国境までは50キロ。そのため、ロシアは侵攻開始直後にハルキウ市中心部へのミサイル攻撃を繰り返し、今もその傷跡が色濃く残る。

ウクライナに入り首都キーウまでの西部は、ほとんど戦争の雰囲気を感じなかった。ところが東部のハルキウに入ると様子が一変する。

毎日のようにロシア側からのミサイル攻撃が続いている。ハルキウ市には防空システムが備えられている（首都キーウほど洗練されたものではない）。夜はロシアからのミサイル攻撃に備えて街が真っ暗になる。ロシアから発射されたミサイルとそれを撃ち落とすウクライナの迎撃ミサイルが空中で激突して落下する様子が見られた。筆者は民宿の庭から夜空を流れ落ちる光を巨大な花火のようだと眺めていた。ハルキウを狙うロシア製ミサイルは短距離のもののため発射から着弾までの時間が短い。そのため全てを迎撃できるわけではなく週に1度はミサイルが市内に着弾するそうだ。運が悪ければ弾に当たる街である。

日本財団では半年にわたってウクライナ東部の戦闘地域から障害のある住民を救出する事業を行っている。国連には子供や女性を対象にした組織はあるものの、障害者を専門にした機関はない。戦争や災害などの緊急事態で最も支援が届きにくい人たちだ。非難をしたくても体の障害で動けなかったり、目や耳に障害があることで正確な情報を素早く得ることができず、逃げ遅れるケースが多い。このため、日本財団では障害者の救出を行うことにした。

筆者が現地を訪れた2022年10月初め、ウクライナ軍は東部でロシア軍に攻勢をかけ、およそ半年もの間、ロシアに占領されていた地域の奪還が続いていた。こうした奪還作戦の戦闘では多くの住民も巻き込まれた。しかし、こうした町では電力や医師の不足から満足な治療が受けられず、赤十字はハルキウ市の拠点病院まで怪我人の搬送に力を注いでいた。筆者はハルキウから100キロ以上離れた町の病院に収容されているケガ人の搬送に同行した。

ハルキウから片道5時間をかけて、ロシア国境の道路を移動。戦車や大型の軍用トラックの走行で道路は酷く傷んでおり、大きな穴があちこちにあいている。その穴を交わしながら、時速100キロ近いスピードで走行する。ただ、このスピードが大きなりスクにもなっている。

車両数台で移動していた時、後方で大きな爆発が起きた。その時はロシアからの攻撃だと思ったが、一緒に移動していた救急車の1台が地雷を踏んで大破したとあとで知らされた。奪還した地域ではあちこちに地雷が埋められており、道路の外には一切出ないよう厳しく言われている。トイレも路上ですませる。大破した救急車は高速走行中、カーブを曲がりきれず、わずかにタイヤが舗装道路の外にはみ出した。そこに地雷が仕掛けられており、爆発したわけだ。乗っていたドライバー、医師、救命士の3人が犠牲になった。

紛争地域で一倍怖いのは交通事故である。ハルキウの赤十字のスタッフはボランティアが多く、正式な訓練を受けていない者がほとんどである。3日間、一緒に行動していて強く感じたのは、彼らが蛮勇に駆られて危険地に立ち入り、自らの身を危険に晒している現状だ。現地ではさまざまな支援が必要とされているが、赤十字のスタッフの安全管理トレーニングも重要な支援だと痛感した。戦場でよく見る光景だが、アドレナリンが出続けて、恐怖に対する感覚が麻痺している若者が多くいた。

1週間あまりをかけてウクライナを西から東へ陸路合計3000キロ移動した。日本のニュースで報じられている戦闘地域は東部の一部だけである。ウクライナの90%は比較的平穏な状態である。(その後、ロシアによる停電が続き、市民はさらに厳しい状況を強いられている。しかし、戦闘地域は限られている)。報道は真実を伝えられない。筆者の仮説は当たってしまった。やはり、自分の目で見なければわからないことはたくさんあるのである。

ただ、間違えないで欲しいのは、今回のウクライナ訪問は日本の外務省が渡航を厳しく禁止する中で筆者の判断で行ったものだ。それは現地での活動の判断を迫られ、必要に応じて行ったものである。その上で赤十字という現地を知り尽くしたホストがいた。最小限の人員でリスクを最小限にする行動計画を綿密に練り上げ行ったものである。興味本位で実行した行動ではないことを重ねて強調しておく。

※発表資料：「ウクライナ東部訪問：ニュースは真実を伝えない」より引用
https://note.com/i_kabasawa/n/n6b8181e67106

◆シンポジウム

「学生が経験したボランティア活動の現実とその後」として、現地ボランティア活動に参加した学生2名からの報告、ならびにコメンテーターの樺沢氏を交え、またフロアからの質問を織り交ぜながら、ロシアによるウクライナ侵攻から約1年というタイミングで、我々ができる支援活動を多方面から議論した。進行は、コーディネーターの二宮が務めた。

・報告者：山本紳介（発表趣旨）

日本財団は、日本財団ボランティアセンターと共催で、ウクライナ避難民支援のためのボランティア活動「The Volunteer Program for Ukraine」に参加し、Group 1（2022年5月30日から6月16日）にて現地で活動。避難民支援を実施する中で、自分の力のなさ、国際的に集まったボランティアと共同してボランティア活動を実施することの難しさを実感する。しかし、それと同時に社会を動かしているのはその一人一人の力の集合体であることを改めて認識し、帰国後は、災害ボランティア活動等に参加しながら、自分ができることを取り組んでいる。

・報告者：桃園愛実（発表趣旨）

同じく、Group 4にて現地で活動する。支援内容は、ドイツ行き無料列車の乗車支援、環境整備等に関わる。特に、避難民が時間を過ごすシェルターの準備に関わるが、避難民との直接的な交流が少なかったために、思い描いた活動内容と異なったことに違和感を覚えた。しかし、帰国後の他のグループからの活動報告を聞いて、自分達の整備作業が基礎となっていたことを把握し、ボランティア活動の幅広さを実感した。また、現在は防寒着を現地に届ける活動を、参加した学生ボランティアと協力しながら活動を企画運営している。